

第8班

『戦時下日本の大衆メディア研究』

(1) 共同研究員名

研究代表者：安田常雄

共同研究員：森武磨 大串潤児 森山優

研究協力者：富澤達三 小山亮 新垣夢乃 松本和樹 原田広 鈴木一史

(2) 研究目的

この研究は、近年日本近現代史研究においても、広がりを見せている戦時下大衆メディアを対象に、そのプロパガンダ機能などを通して、戦時下大衆文化の構造を検証し、戦時体制の特質を再考することにある。具体的には、非文字資料研究センターに収蔵された「国策紙芝居」資料を中心に、資料収集に努めるとともに、いまだ不十分である戦時下大衆文化の分析視角の共有化を進めること。また同時代の映画・マンガ・アニメ・流行歌・戦争画などどのような関係にあるかに留意し、それを通してメディアとしての「国策紙芝居」の歴史的位置を再考することを目的にする。また同時代の紙芝居は帝国日本の版図に広がったことにも注目し、植民地であった台湾・朝鮮半島さらには東南アジア地域での展開をも展望したいと考えている。

(3) 活動経過（目的達成のための方法、各年度の研究・調査経過、成果の公開状況）

目的達成のための方法としては、年に2、3回の研究会を開催し、個別報告と討論を通して、問題意識や資料・方法についての認識の共有化を図るとともに、「国策紙芝居」の「拠点」となった地域（植民地を含めた）を中心に、現地調査と「国策紙芝居」の実物収集に努めた。また同時に「国策紙芝居」を観た経験者の聞き書きを行ってきた。2014～16年度の研究会・調査の概要は以下の通りである。

[2014年度の研究・調査報告]

2014年度第1回研究会 2014年4月30日（神奈川大学）

2014年度第2回研究会 2014年8月27日（神奈川大学）

報告：新垣夢乃、松本和樹「日本教育紙芝居協会の活動（1938～42年）——雑誌『紙芝居』・『教育紙芝居』本部日誌を中心に」

報告：富澤達三「近藤日出造について——マンガ史のなかで」

報告：櫻本富雄「戦時下文化人の言論」

聞き取り調査（紙芝居作家、小谷野半二氏の遺族）。2014年9月5日、埼玉県浦和市にて。安田常雄・原田広参加。未発見紙芝居2点確認「新興タイ国」（佐木秋夫編輯、小谷野半二絵、日本教育紙芝居協会、1941年）、「日満親善餅」（小谷野半二編輯、日本教育画劇株式会社、1942年）

戦時下映画調査。2014年12月13日、国立近代美術館フィルムセンター。「チョコレートと兵隊」（佐藤武監督、東宝、1938年）、「望楼の決死隊」（今井正監督、東宝、1943年）

2014年度台湾紙芝居調査、2015年2月26日～3月2日台南市末廣公学校（現在進学国民小学校）。戦時下台湾の紙芝居12点、紙芝居脚本12点を確認、また当時の学校関係の公文書の調査を行う。さらに同校卒業生の王灼明氏（1932年生まれ）と張義成氏（1933年生まれ）のお二人から聞き書きを行う。また前々日には台北で東俊賢氏の聞き書きを行った。

2014年度九州福岡調査、2015年3月12日～15日。まず3月12日には、九州大学総合研究博物館にてレコード紙芝居調査を行う。当日視聴したレコード紙芝居は、「軍神広瀬中佐」（REGAL）、「軍神荒木大尉」（REGAL）、「愛馬の戦死」（コアレコード）、「軍神古賀連隊長」（太陽）、「日の丸太郎」（TEICHIKU）、「ラッキョウと兵隊」（KING RECORD）の6点であった。また3月13日～15日には、大刀洗平和記念館にて、4点の紙芝居調査を行う。一点は断片でタイトルも不明であるが、残り3点は、「軍人援護日誌 七日間」（1942年7月15日、日本紙芝居協会、編輯者：佐木秋夫）、「英霊に応ふ」（1943年9月25日、軍人援護画劇、大日本画劇株式会社）、「彌作貯水池」（1943年9月25日、恩賜財団軍人援護会・軍事保護院、上里吉暁作、清水幸太郎画）であった。また筑前町めぐばる図書館において、当時の紙芝居教師、平島三悟に関する学級週報『野情』（No.1、1940年5月7日～No.14、1941年2月）などの資料収集を行った。

2014年度第3回研究会 2015年3月26日（神奈川大学）

講演：鈴木常勝「日本統治下の朝鮮、台湾での国策紙芝居」

報告：小山亮「『東方会』コレクションと東方会研究」

報告：鈴木一史「戦場を描く——戦争画と紙芝居の比較から」

[2015年度研究・調査報告]

2015年度紙芝居国内調査、2015年8月8日、昭和館、国策紙芝居の数量調査および現物調査を行う。

2015年度第1回紙芝居研究会、2015年8月9日（神奈川大学）、紙芝居解題、個別論文などについて打ち合わせを行う。

2015年8月、戦後70年特別企画として、本研究班による連載記事が時事通信社の配信によって、高知新聞などに掲載された。安田常雄・森山優・原田広・大串潤児「紙芝居が描いた戦争」全10回。

2015年度台湾紙芝居調査。2015年9月11日～16日。まず9月12日には宜蘭県史館において、李英茂氏（1929年生まれ）より紙芝居の聞き書きを行った。また9月13日には、台北の太平国民小学校（当時大稻埕公学校）では、卒業生の蔡嘉元氏（1930年生まれ）、柯明正氏（1930年生まれ）より日本統治下の台湾紙芝居の聞き書きと資料調査を行った。

2015年国内調査 2015年11月1日、東京の子どもの文化研究所で調査を行う。所蔵の国策紙芝居や関連資料の調査を行う。

2015年国内調査 2015年11月5日、横浜市神奈川区の日本バプテスト同盟捜真バプテスト教会にお

いて、日本統治下の朝鮮・台湾でのキリスト教紙芝居伝道に関する聞き書きを行った。

2015年度台湾紙芝居調査。2015年12月7日～12月13日。台中彰化の収集家宅において紙芝居調査を行う。また台南の国立歴史博物館において紙芝居現物の調査および写真撮影を行う。また台南市立人国民小学において資料調査。12月11日～12日は、国立台湾大学において開催された、国立台湾大学歴史学系、神奈川大学常民文化研究所・非文字資料研究センター共催の第一回公開研究会（国際シンポジウム）「帝国日本と台湾の眼差し——非文字資料の利用」に合流し、「戦時中の紙芝居と宣伝——日本と台湾の場合」（安田常雄）の報告を行った。

2015年度第2回紙芝居研究会（神奈川大学）、2016年3月25日、紙芝居解題、論文作成、今年度活動についての打ち合わせを行った。

[2016年度研究・調査報告]

2016年7月23日～26日 ブリティッシュ・コロンビア大学で行われた、UBC・神奈川大学非文字資料研究センター共催シンポジウムに参加し、「戦時下日本の紙芝居と植民地」と題して報告する（安田常雄）。

2016年8月28日、2016年度第1回紙芝居研究会（神奈川大学）、紙芝居解題、論文作成などについて、現段階での論文構想を報告し、議論が行われた。

2016年度台湾紙芝居調査、2016年11月4日～7日、11月5日、台中の南投県草屯鎮のコレクター、梁志忠氏宅において資料調査を行う。また同日、簡克修氏（1930年生まれ）の聞き書きを行う。

2017年1月21日、2016年度第2回研究会（神奈川大学）、韓国において「国策紙芝居」研究を行っている韓国研究者である建国大学、權希珠氏による「植民地朝鮮の紙芝居——視覚メディアを利用した情報宣伝」と題する報告が行われた。

2017年3月24日、2016年度第3回紙芝居研究会（神奈川大学）、今年度、民間出版社から刊行予定の「研究報告」について、解題原稿、論文原稿の読み合せを含め、全体的な検討を行った。

(4) 研究成果（成果物、獲得された知見、収集資料の解題等）

「国策紙芝居」は通常約1000点が作成されたといわれているが、敗戦時に大量の作品が焼却・廃棄されたものと思われる。それは例えばGHQの指示により、あるいは作者自身によって廃棄されたものなど、その理由は多様である。そのため現段階における追跡・発掘は非常に困難であるが、この間の調査などによって、神奈川大学に收藏された241点を含め、現段階では約500点の所在が判明しつつある。この共同研究では、これらの調査結果をふまえ、「国策紙芝居」の「全国書誌情報」の作成を続けてきた。

また共同研究の基礎となっている神奈川大学所蔵の241点については、一点ずつについて、作品「解題」を作成した（現段階ではほぼ出来上がりつつある）。その「解題」の内容は、「あらすじ」「プロット」（作品批評）を中心に、「研究報告」1ページに1作品を割り当て、表紙と数枚のカラー図版によって構成することになる。また「全国書誌情報」については、一点ずつの紙芝居が、現在所蔵されている機関（大学・研究所・博物館など）が明記され、集約されるものとなる。

現段階での活字になった「成果物」については、以下の通りである。

安田常雄「戦時下日本の大衆メディア研究」ニューズレター『非文字資料研究』No. 32、2014年7月、p. 6

安田常雄「紙芝居共同研究の根もとにあるもの」ニューズレター『非文字資料研究』No. 32、2014年7月、p. 32-33

原田広「戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語——「用語編」その1」ニューズレター『非文字資料研究』No. 33、2015年1月、p. 38-45

安田常雄・森山優・原田広・大串潤児「紙芝居が描いた戦争」全10回、戦後70年特別企画として、本研究班による連載記事が時事通信社の配信によって、高知新聞などに掲載された。

安田常雄「台湾・福岡調査報告」ニューズレター『非文字資料研究』No. 34、2015年9月、p. 20-23

原田広「戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語——「用語編」その2」ニューズレター『非文字資料研究』No. 34、2015年9月、p. 48-55

鈴木一史・松本和樹「台湾調査報告」ニューズレター『非文字資料研究』No. 35、2016年1月、p. 18-21

原田広「戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語——「用語編」その3」ニューズレター『非文字資料研究』No. 35、2016年1月、p. 26-33

安田常雄、原田広インタビュー「「国策紙芝居」、敵を鬼や虫に、戦時中、米英首脳を描く、世論への影響を研究、神奈川大学」という見出しの記事が掲載された。これは共同通信の配信による記事であり、『日本経済新聞』（2016年8月17日付、夕刊）などに掲載された。

原田広「戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語——「用語編」その4」『非文字資料研究センター News Letter』No. 36、2016年9月、p. 24-32

「日學者訪台 尋找紙芝居」『中国時報』中華民國 105（2016）年 11 月 6 日付

新垣夢乃「东亚視域下的非文字資料研究／東アジアにおける非文字資料研究」『非文字資料研究センター News Letter』No. 37、2017年1月、p. 10-17

原田広「戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語——「用語編」その5」『非文字資料研究センター News Letter』No. 37、2017年1月、p. 38-48

(5) 今後の課題と展望（自己点検・評価）

本共同研究は、調査については九州・台湾などを中心に、現物発掘や聞き書きなど行い、多くの成果をあげることができた。その結果については、前述した「研究報告」で発表することになる。その軸は①「作品解題」、②「全国書誌情報」、③「個別論文」となるだろう。

また今後の展望については、フィールドとして日本統治下の朝鮮にも拡張する見込みがあり、植民地紙芝居研究の深化が期待される。また今期の継続活動として「全国残存状況」調査や、新しい視点に基づく個別研究の展開も期待される。